津市立南が丘小学校だより

かがやく未来

2025. 9. 1 NO11

2学期も宜しくお願いします！

一昨年、国連のグテーレス事務総長が「世界は沸騰化時代に入った」と発言した通り、今年も異常気象により40℃を超える地点が連日、発生したり、九州をはじめ、至る所で豪雨と落雷が続いたりするなどこれまでの常識では考えられない気候となってきています。

44日間という長かった夏休みも終わり、久しぶりに子どもたちの元気な声と表情が学校に戻ってきました。本日、全校児童700名、60名の教職員が校舎内に戻ってきて「いよいよ始まった」と嬉しくもありますが、気を引き締めた次第です。子どもたちの声が返ってきてこれまでシーンとしていた校舎が生き返ったように感じました。始業式のあと、各教室では夏休みの宿題を提出し、夏休みの生活について話し合っている学級もありました。夏休みの間、ご家庭でのお子様の様子はいかがだったでしょうか？2学期は遠足・社会見学・修学旅行・運動会などの行事があります。1年の中で一番長い学期となりますが子どもたちはたくさんの経験の中で大きく成長していく時期でもあります。2学期もご理解・ご協力を宜しくお願いします。

「そういう振る舞いをしなくてはいけない」～須江　航監督の言葉より

今年も真夏の甲子園では高校野球児の熱戦が繰り広げられました。須江　航監督は３年前仙台育英高校が優勝した直後、優勝監督インタビューの中で“コロナ禍を乗り越えてあきらめないでやってくれた日本国中の高校生を称えてやってほしい”と発言し、観ている人に感動を与えたことで有名になった方です。今年は８月６日の第１試合で仙台育英高校は、５点リードの８回裏の守備の時、２年生の選手が足をつり、担架で運ばれ途中交代するというアクシデントがおきました。試合後、須江監督は自分のチームの選手が足をつった時に相手の鳥取城北高の選手が足を伸ばしてくれたり、『水だ』と言ってやってくれたりました。「早く攻めたいところ気遣いをしてくれて、これが高校野球。僕たちもそういう振る舞いを次戦以降しなくてはいけない」と感謝の気持ちを伝えたそうです。試合である以上、お互いに必死になって戦い、勝ち抜いていくことを目指すことは当然のことでしょう。しかし、須江監督はいつも自校の選手、相手校の選手として見ず、同じ野球をやっている高校生として捉え、人間性を認め、ほめ、取り入れていくという姿勢に私はいつも感動させられます。仙台育英高校は古くから野球の名門校。実は須江監督自身は大勢いる部員の中でずっと控え選手で、どうしたら試合に出られるか悩んだ経験を活かしながら監督として選手一人一人のことを思い、励まし、指導をされてきたそうです。その監督のもと、チームは団結力を培い、見事、大偉業を成し遂げることができたのです。私たち学校の教職員も今一度、原点に返り、さらに児童１人１人をよく見、励まし、指導をしていくことが児童の未来を、成長させていくことができるとの思いで２学期も取り組んでいきたいと思います。そして、何より優勝した直後であるにも関わらず、甲子園にすら出られなかった高校生のこれまでの努力を思いはかり、“拍手を送ってもらえたら…”と発言できる監督に感銘を受け、自分自身もかくありたいと思ったこの夏でした。